

## 日本語の再発見

### 万葉仮名

和我夜度爾 左加里爾散家留 宇梅能波奈 知流倍久奈里奴  
美牟必登聞我母

これは『万葉集』に見える和歌の一つであるが、この歌に用ひられてゐる漢字は、すべて“仮借”の用法で、文字通り“万葉仮名”の好例なので、ここに引用した。

“梅”は仮名ではない、と思はれる方があつたらうと思ふので、一言するが、この“梅”は紛れもなく“仮名”として用ひられてゐるのである。

辞典で調べて見ればお解りになるが、“梅”の漢音はバイだが、呉音はメである。(漢音は七世紀以後、遣唐使によって初めて我が国に入つて来たものだが、それ以前の漢字は呉音で読まれてゐたので、この頃もほとんど呉音で読まれてゐた)梅の木は日本には無く、従つて、“梅”を表す日本語は無かつたのである。中国人の渡来と共に渡来したものである。

だから、中国人に「これは“メ”といふ木だ」と教へられた事と思ふが、“ン”といふ字を我々は“ウン”と発音するやうに、“ウメ”と発音するやう

## 第五章 日本の文字

にたったものである。因みに、“馬”も呉音はマで、それが“ウマ”と発音されるやうになった。だから、“ウメ”も“ウマ”も、純粹の日本語(和語)ではなくて、外来語なのである。

『古事記』の冒頭には、撰者の太安萬侶の序文があつて、その中に、「全く音をもちて連ねたるは、事の趣 更に長し」とある。「全く音をもちて連ねる」とは、「和我夜度爾……」といふやうに、仮借した漢字を書き連ねることであり、そのやうな表記では、文章が長たらしくなつて読み難く、解り難いことを「事の趣 更に長し」と言つてゐるのである。